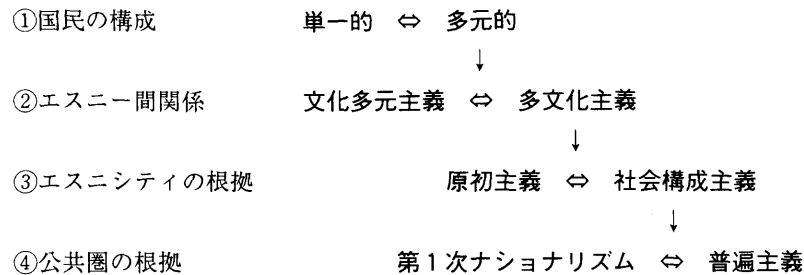


た。



1980年代以降に多文化主義が直面した問題は、エスニシティの根拠をめぐる論点③であり、そこでは各エスニーには固有の原初的紐帯があるとする原初主義と、エスニックな特徴は全体社会の中でのそのエスニーの社会的地位によって構成されるとする社会構成主義が分岐することとなった。多文化主義の発想の中でも人間の多様性を個人単位のそれにまで腑分けして考えようとする議論は、当然後者の立場に立ったのに加えて、エスニー単位で行使されるマイノリティの政治力を「個人主義」によって解体しようとする新保守主義の議論も後者の立場に加わることとなった。1980年代の歴史教育におけるマイノリティに関する情報の背後には、このような構図を見て取ることができる。

そして1990年代の歴史教科書からは、エスニシティの重要性を相対化された諸個人が志向する公共圏の根拠をめぐる論点④を指摘することができる。強制収容所内の日系人の生活に関する記述や独立戦争時のアフリカ系の人びとの視点に基づく記述は、普遍主義を拠り所とした共同性に根拠をおいた価値判断を提示していた。その一方、世界を国民という単位で分断する認識である第1次ナショナリズムは、「アメリカ」という枠組みを歴史認識の前提とし、そのような普遍主義的な発想の適用範囲を「アメリカ」の内側に留めようとする。旧来のエスニックなカテゴリを離れて人間の尊厳を理解する日系の若者が、それでもアメリカの公民権に価値判断の根拠を求める現象は、それと呼応する。20世紀末において、多文化主義に基づく歴史教育は、それがなおナショナルな枠組みを維持するがために、エスニシティの相対化によってナショナリティそのものを浮かび上がらせる論理を提示する面ももつことになったのである。

公教育の力は国家という制度に由来するとし、それが国民教育の手段として機能することを重視する立場からすれば、この構図は初期の構想を全うするものといえる。しかし社会の構成要素の多様性を十全に表現することを目指す多文化教育の観点からすれば、ナショナリティへの注目に帰結する教育は、本来解決すべき問題を自ら生み出しているという意味で、差別構造のマッチポンプになりかねない。ナショナリティの区別は国内に持ち込まれば、エスニシティの区別に転化するからである。

もちろん他方では、普遍主義をより強く志向することによって、このような構図を脱しようとする多文化教育の試みもある。そこでは、国民内部の多元的要素を扱う多文化教育から、エスニシティ・ナショナリティ・ユニバーサリティといった位相の異なる共同性を同時に満たす多文化教育への転換がより積極的に行われているといえる。志向する多元性を、いわば平面的なものから立体的なものへと組み直す作業が行われていると表現してよいかも知れない。

たとえば映像作家リナ・ホシノは、その作品『Caught in Between — 「故郷(くに)」を失った人々の物語』の中で9.11テロ以降に日系コミュニティとムスリムコミュニティが連帯していく様を描くが、そこでは人間の尊厳と基本的自由を害するものに抗する視点が貫徹されている⁽³⁴⁾。「アメリカ国民の尊厳と自由」に限定されないメッセージのために、この作品の上映会はナショナリティやエスニシティの同一性に依拠しない草の根のネットワークに支えられ、人権を普遍主義の観点に立って考え得る場を形成するのである。かつて日系人が収容された強制収容所をムスリムが訪れ、日系南米人に対する合衆国政府の謝罪と補償の必要性を東京に住む日本人が考えるといった活動が、そこから可能になる⁽³⁵⁾。

またたとえばJANM(全米日系人博物館)が2000年以降に作成し、教育者向けに頒布している日系人史学習教材においては、日系人というカテゴリを越えた共同体の理解と、そこで様々に異なる背景をもった人びとが共有してきた理念についての学習を促すことが意図されている。ロサンゼルス市のボイルハイツというエリアで混淆したエスニーたちが共存してきた事実を伝達する教材⁽³⁶⁾や、日系人の経験を素材にアメリカの民主主義それ自体の歴史を伝達する教材⁽³⁷⁾は、その内容が各教科の学習単元を充たすように構成され、全米から教員を招いて行われる研修会で用いられている。歴史学習における各エスニーの過去の並存を求めた多文化教育の理想をさらに越えて、あらゆる背景をもった人びとがあらゆるエスニ